

# 金沢

## かわら版

8

### 尾張町しにせ通りで

「セド」まで続く。

金沢の町は面白いことに、この家にも食べられる実のなる木が多い。だからセドの端の方には、李(すもも)や梨(ぐみ)、栗(くり)、柿(かき)の木が植えられている。何かの時に備えた非常食なのか。

似たような奥の深い家で中庭を持つ京都では、この中庭に馬を飼っていたと聞く。

「家のセドは、冬場の大雪になつたら屋根雪を下ろすのに使うんや。その積み上がった雪は通り庭から表通りへ出すのに便利なように、中戸は全体が開くようになつてる。木が端の方にあるんは、下ろした雪で折れんため」

曰くろ、何げなく尋らす住まいに、ふと北陸特有の生活を感じた。

会  
合  
（石野 瑠一＝尾張町若手

### 商家の通り庭

金沢の商家の面口は狭い。江戸時代、面口廻りで税金が決められていたので、筋地のために必要以上に面口を広げなかったのだらう。その代わり、奥行きは深い。店によっては裏通りまで突き抜けている。表から入ると、板敷きの店先の横から細い土間の通路がずっと奥へ延び、「通り庭」といって親しまれている。

今はコンクリートになっているが、小さいころは土が蒸気があがり、外へ出られないと、日に何度となく走り抜けて遊んだもの。そうしてまた雪が積もったり、雨が降ったりした時は、この土間が黒光りして不思議な気になされた。

「空気の中の悪いもんを、みんな吸い取るから、家中が息災で抱られるんや。ほら、早う息をまいてあげん」と

祖母の迷信めいた話でなく、冷静に考えれば、大気中の湿気を土が吸収するのを場が助長するから。ひんやりと空気は冷んでくるし、土間は湿気を帯びてぬれたようになる。

長い年月の積み重ねによる、



商家

狭い面口を補うように、商家の奥行きと高さは伸びた